

# 発達障害者に対するトータルパッケージの活用

○ 小池磨美・刎田文記・戸田ルナ・望月葉子・小泉哲雄・岩崎容子  
(障害者職業総合センター 障害者支援部門)

## 1. はじめに

発達障害者支援法の制定後、高機能自閉症や学習障害等の「発達障害」とされる人たちが地域障害者職業センター等を利用する機会も増加すると考えられ、その障害特徴に応じたきめの細かい対応が必要とされるようになる。

「発達障害」者の多くは、幼年期から青年期にかけて、学習面や行動面でネガティブな経験をしていることが多く、能力や行動面の問題だけでなく、自己評価や自己認識の不適切さという課題を抱えている。

これまで職場適応促進のためのトータルパッケージ(以下「TP」という。)を高次脳機能障害者や精神障害者に活用する中で、作業遂行上表出する課題は「認知障害」を原因として起こるものと考えてきた。今回、発達障害者にTPを実施するに当たっても、彼らの作業遂行上の課題については、「認知障害」を原因として捉えるとともに、障害認識を含む自己認識については、以下に示す「障害認識段階モデル」を用いて検討することとした。(図1参照)

そこで、今回の実施に際してはその障害特性に配慮し、①感情面での変化や表出、②自らの現実的な状況の受け止め方とその内容に留意し、③認識の転換につながるポジティブな体験ができるように努めた。

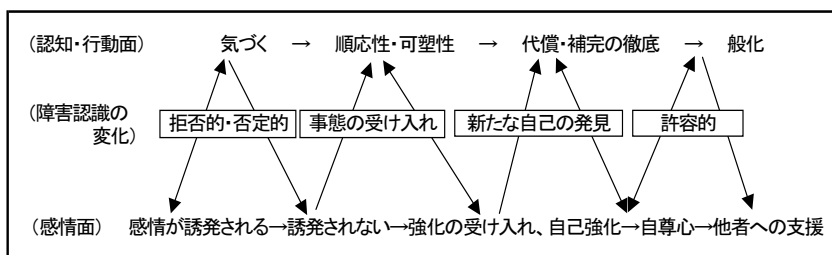


図1 障害認識段階モデル

## 2. 方法

対象者の属性及び実施内容等について、表1に示した。なお、ワークサンプル(幕張版)(以下「MWS」という。)の作業の選定については、ケースの希望と

実施者の想定する作業可能領域とを勘案し、随時決定した。

## 3. 実施状況及び結果

### <事例A>

#### 実施状況

##### (1) 補完手段による定型的なミスの消失

「検索修正」開始当初、定型的なミス(住所の修正等)の表出が見られたため、傾向をフィードバックし、「データ修正指示書」の住所に赤鉛筆で区切りを入れるという補完手段を提案し、受け入れられた。その後、ミスは消失し、自発的な補完手段の使用が認められるようになった。

##### (2) ミスの消失に向けた目標設定

補完手段の使用により、「検索修正」における定型的なミスは消失したものの、傾向の特定できないミスが頻発し、集中力の低下が窺われたため、「集中可能な作業量」について目標設定を勧めた。ケースからは、それまでより1ブロック少ない2ブロック連続実施の意向が示され、実施したところ、ミスが減少し、作業時間の短縮が認められた。

##### (3) セルフインストラクション

「物品請求書」の品名と品番の照合にあたってミスが表出するため、「復唱」と「見直し」の2つの補完行動を実施することとした。その際に、補完行動について、メモリーノートに「重要メモ」に自発的に書き留めたため、作業開始時に読み上げるように指示した。開始当初は試行毎の読み上げには声掛けを必要としたが、慣れるに従い自発的な行動として定着が図られ、ミスは消失した。

##### (4) スケジューリング

実施者が取りまとめた「検索修正」及び「物品請求書」の実施状況をもとに、ケース自身が精度と能

表1 対象者一覧表

| 対象者 | 障害種別   | 学歴    | 実施時間 | 実施内容 |      |       |        |      |       |      |       |       |
|-----|--------|-------|------|------|------|-------|--------|------|-------|------|-------|-------|
|     |        |       |      | WCST | 検索修正 | 物品請求書 | 数値チェック | 文書入力 | プラグタッ | 作業日報 | ビッキング | 簡易版実務 |
| A   | アスペルガー | 大学卒   | 19   |      |      |       |        |      |       |      |       |       |
| B   | 発達障害   | 大学卒   | 35   |      |      |       |        |      |       |      |       |       |
| C   | 発達障害   | 大学在学中 | 36   |      |      |       |        |      |       |      |       |       |

率の落ちない作業計画を立案し、目標時間を設定した。作業実施状況としては、目標時間には至らなかったものの、補完手段は適切に使用でき、ミスのない作業が行えた。

**結果**

**(1) 作業遂行上の課題の受け入れの特徴**

TP開始当初の定型的なミスの表出に際し、適切な補完手段の使用により、ミスが消失した。このことで「自分にとって好ましい自己イメージや自己評価ができるようになるための強化」が促進され、ミスの軽減に対する補完手段の受け入れとその強化には積極的に取り組むことができるようになった。このような行動は他の作業においても認められ、ケースにとってはパターン化されていると考えられる。また、「障害認識段階モデル」における「強化の受け入れ・自己強化」までの、感情面での揺れは少なく、感情面では、「自尊心」を満足させる方向に向かったと考えられる。

**(2) セルフマネジメント**

認知・行動面においては、感情面での強化を背景に、セルフインストラクションによる「代償・補完の徹底」が図られた(表2)。これは、セルフマネジメントレベルにおいては、「補完手段を習得し活用している」という「自発」的な行動として理解できる。

また、ケース自身が自らの実施状況をもとに自らの作業遂行能力に応じた実施計画と目標を設定することにより「自分の行動を自分でマネジメント」し、「継続している」状況にある。これはセルフマネジメントレベルにおける「選択・自発」的行動だといえる(表2)。

**<事例B>**

**実施状況**

**(1) 作業遂行上の課題の把握と補完手段の利用**

「検索修正」においては、開始当初からID番号の入力にミスがでたため、「数字の区切り読み」と「見直し」の工程を取り入れた。ミスの受け入れに際しては、作業課題の困難さを訴えるなど、ミスをする自己像の受け入れに抵抗を示すことも認められた。しかしながら、補完手段がミスの軽減につながることで意識されるにつれて、抵抗感は薄くなり、補完手段を使用することに順応していった。また、「検索修正」における補完手段の導入は、「ピッキング」における「見直し」、「物品請求書」における「付箋の活用」といった新規場面での補完手段を受け入れる態度に繋がった。

**(2) 可能作業領域の探索**

ケースは、パソコンでの入力作業については、タッチタイプができ、自分なりの自信を持っていたが、「検索修正」において、ミスが頻発したこともあり、自分に向いている仕事についての見通しが曖昧になっていた。一方「ピッキング」の実施に当たっては、「作業の最後に見直す」という確認行動を取り入れたことで、精度・スピードの両面共にケース自身が納得できる作業遂行となった。この結果、OA作業における自らの困難度を受け入れることができ、同時に、新たな体験であった「ピッキング」への興味・関心が示されるようになった。また、次にはケースから自発的に「物品請求書」の希望が出され、OA操作から事務作業系への志向性の展開が認められた。

**結果**

**(1) 補完手段の利用体験による自己強化**

ミスの頻発した「検索修正」において、補完手段

表2 実施状況と障害認識モデル及びセルフマネジメントレベルとの対照表

| 行動の分類               | MWS実施状況                        | 障害認識段階モデル |            | セルフマネジメントレベル |
|---------------------|--------------------------------|-----------|------------|--------------|
|                     |                                | 認知・行動面    | 感情面        |              |
| 感情行動                | ネガティブな感情が誘発され、悲しんだり怒ったりする。     | 感情が誘発される  | 感情が誘発される   | 強化を受け入れない    |
|                     | ネガティブな感情が誘発されず、感情が安定している。      |           | 誘発されない     | 他者からの強化      |
|                     | 他者からの強化を受け入れる。                 |           | 強化の受け入れ    | 他者からの強化・選択   |
|                     | 自分で自分のことを褒めることができる。            |           | 自己強化       | 選択・自発        |
|                     | 自分の価値を認めることができる                |           | 自尊心        | 自発           |
| 言語行動                | 他者の感情を理解し支援をする。自発的に他者の支えとなる。   | 気づく       | 他者への支援     | 協調           |
|                     | 自分の障害を知っている。                   |           | 他者からの指示    |              |
|                     | 障害がどのように作業や生活に現れるかを知っている。      |           |            |              |
|                     | 補完手段の必要性を理解している。               |           |            |              |
|                     | TPの目的を理解している。                  |           |            |              |
| 非言語行動               | 他者を良いモデル悪いモデルとして認知し、自分と比較できる。  | 順応性・可塑性   | 他者からの指示・選択 | 指示に従うことができる。 |
|                     | 自分の行動を自分でマネジメントできる。(セルフマネジメント) |           |            | 選択・自発        |
|                     | セルフマネジメントを継続できる。               |           |            | 自発           |
|                     | 補完手段を習得し、活用している。               |           |            | 代償・補完の徹底     |
|                     | 新規場面で補完手段を活用することができる。          |           |            | 一般化          |
| 補完手段の活用を工夫することができる。 |                                |           |            |              |
|                     | 補完手段を活用し、問題を解決できる。             |           |            |              |

定着前は「ミスをしている自己像」を受け入れることができず、課題への不満という形で、ネガティブな感情が誘発されていた。しかし、補完手段に順応するにつれて、自らの感情に巻込まれることなく、作業を実施することができるようになり、また、補完手段の定着後は、ミスの減少や作業スピードの向上など具体的な目標に応じた「自己強化」を図ることができるようになった。

### (2) 職務の適合性に向けた志向の組みなおし

作業開始当初、タッチタイプで代表されるOA作業への自信は、ケースの職業意識としての「したい仕事」と結びついていた。OA作業における補完手段を使用した作業習得のプロセスと「ピッキング」や「物品請求書」といった実務・事務作業におけるそのプロセスを比較体験したことで、OA作業に比較して実務・事務作業への適応性を強く感じることで、イメージとして持っていた自らの志向性をより現実に近いものに変更する機会になったといえる。

### (3) 作業体験を通じての障害認識の変化

「ミスをしている自己象」に抵抗を示すという状態は、障害認識において「拒否的・否定的」な段階にあったといえる。このケースの場合には、補完手段の使用・定着に伴い「事態の受け入れ」、事務系作業への志向性といった「新たな自己の発見」へと段階が進み、自らの障害について「許容的」な態度が見られるようになった。

## <事例C>

### 実施状況

#### (1) 作業遂行上の課題の把握と抵抗感

最初に行った「数値チェック」において、見落としが生じたため、補完手段として30cm定規を用いて照合作業を行った。「ファイル整理」においては、各文書の名称が初めて聞くものであり、混乱しやすかったため、メモを用いてその分類の整理を図った。どちらの作業においても、補完手段を使うことへの抵抗感と使うことで作業遂行がスムーズになることの両方を感じ、葛藤を示していた。これはケースが、作業がうまくできない自己像に対する抵抗感を補完手段の活用を避けようとする行動として表出していると考えられた。

#### (2) セルフチェックモードの利用

「検索修正」において、ID番号(8桁)の後半部分の入力ミスが頻発したため、OA課題(Ver.2)において、取り入れられたセルフチェックモードを利用した。自らのミスを実施者から指摘されることなく、パソコンからの注意の喚起を受けることで自己修正が図

れ、正答率が安定した。

### (3) 補完手段の自らの選択による導入

このケースは、前述したように、自らの作業遂行上の課題とともに補完手段のメリットを感じながらもその使用については抵抗感が強い。他方、パソコンのセルフチェックモードによる注意の喚起は、実施者がミスの指摘をしたり補完手段の利用を喚起することよりも抵抗感が少ないことが認められた。そこで、補完手段の導入にあたって、その使用の決定を本人に委ねることとした。

実際の作業場面では、補完手段の具体的な提案がなされても、すぐにそれを取り入れることはなかなか難しかったが、一旦、補完手段を使用し、その効果を体感すると確実に活用しミスの減少を図ろうとする態度が見られるようになった。

## 結果

### (1) 作業遂行上の課題の受け入れと自己認識

自らの作業遂行上の課題の受け入れには、それまでの生育歴における経験が影響を及ぼすと考えられる。このケースの場合には、自らの生活経験での困ったことと作業における課題とが類似したものであることは認識されており、作業遂行上では、補完手段を用いることで改善が図られることも認識していた。しかしながら、補完手段を使用することは、自らの困った状況を認めることであり、さらには「補完手段を用いるのは能力の低さの現れだ」と自分自身で自分にレッテルを貼ることにつながるため、抵抗感が強くなっているものだと考えられた。

### (2) 抵抗感を軽減する自己修正

上述のような自己認識にあるケースに対して、セルフチェックモードを用いた作業は、他者からの注意を直接受けることがなくなるため、心理的な負荷の軽減に役立つと考えられる。今回はこのセルフチェックモードを用いた「自己修正」の徹底の手続きにより正確な作業の遂行と作業ペースの安定につながっていた。しかしながら、セルフチェックモードの使用や補完手段の自主選択による導入のいずれにおいても、その成果を積極的に受け止めたり、自らの努力を認めるといった「自己強化」を示す行動は見られなかった。

## 4. 考察とまとめ

これまで高次脳機能障害者等を中心に実施してきているTP(MWS)については、若年で職業体験の乏しい発達障害者に対しても、次に述べるような可能作業領域の探索や障害認識の変化について検討できる

情報を提示する方法として利用することができると考えられる。

### (1) 遂行可能な作業領域の探索

様々な作業種目から成り立っているMWSを実施することで、対象者の作業遂行上の課題と補完方法の活用、作業習得の可能性を明らかにすることができる。これは、対象者の自律可能な作業領域とその適応状況を推測させ、遂行可能な作業領域の探索につながると思われる。

### (2) 障害認識の変化の読み取り

表2に示した「実施状況と障害認識モデル及びセルフマネジメントレベルとの対照表」の考え方を、「セルフマネジメントマトリックス」に置き換えると表3のようになる。このマトリックス上に、TPにおける対象者の行動の変化をあてはめていくことで、対象者の障害認識の状況についても推測することが可能になると考えられる。

例えば、事例Bについて再整理をすると表3に示したように表すことができる。

「はじめに」で述べたように、発達障害を持つ人たちはその生育歴の影響により微妙なバランスでの自己認識や障害認識を持っている。そのような状況において、支援者が「障害受容」の促進を前面に掲げ支援しようとすることは、対象者自身が自己を否定することにつながりかねない。前述したように、「障害認識モデル」に基づき「認知・行動面」「感情面」の状況の整理を図り、「障害認識の段階」を推測し、適切な配慮につなげることができる。

### (3) 「自己強化」を促進するための支援方法

今回、「自己強化」を促進するための支援として、適切な補完方法の取り入れや行動の変化（正答率の向上や作業能率の改善）への適切なフィードバック、セルフチェックモードの使用、補完手段の自己選択

による導入などを行った。これらの方法は、TPの中では一般的な支援方法であるが、微妙なバランスでの障害認識に配慮し、ポジティブな体験に基づく現実認識への働きかけを行うためには、以下のような方法についても検討が必要だと考えられる。

#### ○ 経験に則った具体的な例示

未経験の作業等の新たな経験に対する「強化」は、状況や過程の説明だけに留まらず、現実の対象者の経験に則った具体的な例を用いて説明する。

#### ○ 支援者の積極的な支持

新たな経験の過程での、補完方法の活用や現実的な自己評価・自己強化等の積極的な姿勢を、支援者が望ましいものとして取り上げ支持することは、対象者に自己の能力や評価についての新たな視点を提示することにつながる。

#### ○ 過程と結果の明確な説明

対象者自身が新たな視点に基づく自分の方向性と目標とを明確に捉えられるように、上述のような行動の変化がもたらす結果とその見通しを具体的に説明する。

これらの具体的な支援方法が、発達障害者の持つ「自己評価や自己認識の不適切さ」という課題の対処として十分なものとなり得るのか、今後、事例を積み重ねる中で、より具体的に支援のプロセスとその方法について明らかにすることが必要だと考える。

<文献>

調査研究報告書No.55「多様な発達障害を有する者への職場適応及び就業支援技法に関する研究」2003

調査研究報告書No.57「精神障害者を中心とする職業リハビリテーション技法に関する総合的研究(最終報告書)」2004

表3 事例Bにおけるセルフマネジメントマトリックスと障害認識の変化

|                 |                |         |         |          |    |
|-----------------|----------------|---------|---------|----------|----|
| 後続条件<br>/感情行動   | 協調             |         |         |          |    |
|                 | 自発             |         |         | 許容的      |    |
|                 | 選択             |         |         | 新たな自己の発見 |    |
|                 | 他者からの強化        |         | 事態の受け入れ |          |    |
|                 | 強化を受け入れない      | 拒否的・否定的 |         |          |    |
|                 | 他者からの指示を受け入れない | 他者からの指示 | 選択      | 自発       | 協調 |
| 先行条件/言語行動・非言語行動 |                |         |         |          |    |

#### ①「拒否的・否定的」→「事態の受け入れ」

自分なりに自信を持っていたOA作業である「検索修正」において、開始当初からミスが出たことは自信の喪失へとつながる。そのため、「ミスをする自己像」への抵抗感が表れ、実施者からの指示についても、作業に対しても、補完手段に対しても「拒否的・不定的」な言動をとっていた。

しかし、補完方法を活用し、達成感が感じられるにつれて、ミスの表出という事態を受け入れられるように変化した。

#### ②「事態の受け入れ」→「新たな自己の発見」

作業が「ピッキング」から「物品請求書」とケースの自発的な選択に応じて展開するにつれて、補完手段を用いることで、OA作業以外で自分自身が納得して作業を行っているという「新たな自己」を見つけることができた。

#### ③「新たな自己の発見」→「許容的」

補完手段が定着し、正確な作業を遂行している「新たな自己」を確認し、実施者に認められることで補完手段を使う自らに対し許容的になった。

# 精神障害者に対するトータルパッケージの活用

○ 勿田文記・戸田ルナ・小池磨美・望月葉子・小泉哲雄・岩崎容子  
(障害者職業総合センター 障害者支援部門)

## 1. はじめに

障害者職業総合センターでは、平成11年度から、精神障害者や高次脳機能障害を有する人に対する評価・支援技法として、事務作業やOA作業、実務作業からなるM-ワークサンプル(以下「MWS」という)、情報の整理方法の獲得を目的としたM-メモリーノート等の開発を行った。また、これらの開発物を障害者に試行する中で、効果的な実践方法として「職場適応促進のためのトータルパッケージ(以下「TP」という)」を提唱している。さらに、精神障害者等の場合、ストレス・疲労の捉え方や対処行動の確立が職業生活を安定させる重要な要件の一つであると考え、それらの問題への支援方法を、応用行動分析的な視点から検討してきた。

今回は、TPを用いたストレス・疲労への対処行動をセルフマネジメント・スキルとして構築するための指導・支援方法について事例を通して検討する。

## 2. 方法

### (1) 対象者

A生活支援センターで支援を受けている精神障害者7名を対象に、A生活支援センターの2階の一室でトータルパッケージを実施した。対象者7名に対し、常時3名の支援者が支援を行った。

対象者毎の主な作業に応じて、随時、作業机を割り当てた。休憩を取りやすい環境作りとして、ミーティング用の机に、スイーツボックス(数種のお菓子の入った箱)を置いた。

1階には自由に使える給湯設備のある休憩室があった。

表1に対象者の概要を示した。各対象者とも、職歴はあるものの、ストレス・疲労に対する対処行動は「我慢する」「何もしない」等が多く、職場での適切な対処行動

への理解は不十分であった。

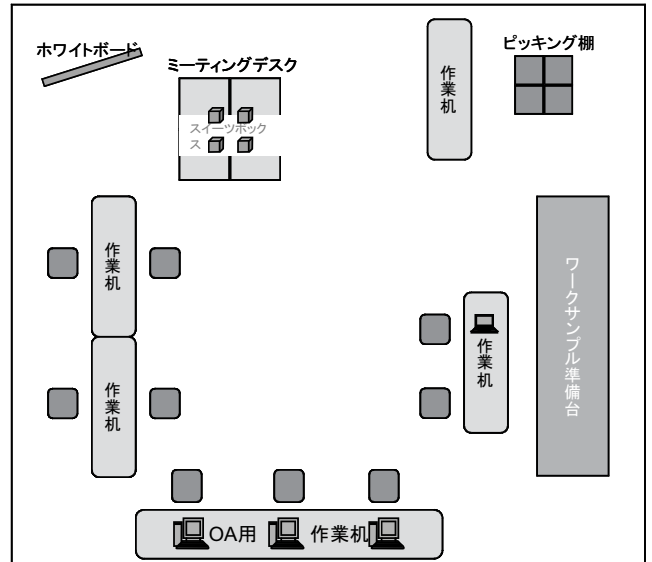


図1. トータルパッケージの実施場面  
(2) カリキュラム

TPは、4日間にわたって実施した。

1日目の最初にオリエンテーションを行い、対象者には、事前に趣旨・目的を説明し研究に対する同意を得た。次に、日々の予定等の自己管理に用いるM-メモリーノートの書き分け訓練と、ストレスや疲労の生起に関連する情報収集を目的に幕張ストレス・疲労アセスメントシートの記入を平行して行った。次に、1日目後半から2日目前半にかけて、認知障害の状況と補完手段の有効性の把握、本人の障害認識の促進のためにWisconsin Card Sorting Testと、MWS(簡易版)を並行して実施した。

2日目後半から4日目にかけては、上述の実施結果等と対象者毎の希望を勘案し、個々に主たる作業種目を決定し、各作業を簡易なレベルから段階的に難易度レベルを上げて作業を行った。

これらの作業では、対象者毎に生じたエラーに対応できるよう補完方法を調整した。

表1. 対象者の属性とトータルパッケージの実施状況

| 対象者          | A     | B              | C     | D           | E               | F              | G                |
|--------------|-------|----------------|-------|-------------|-----------------|----------------|------------------|
| 性別/年齢        | 女/30代 | 女/30代          | 女/30代 | 女/30代       | 男/30代           | 男/30代          | 男/20代            |
| 障害名          | 統合失調症 | 統合失調症          | 統合失調症 | 統合失調症       | 統合失調症           | 人格障害<br>(うつ傾向) | 高次脳機能障害<br>統合失調症 |
| TPでの<br>主な作業 | ラベル作成 | 数値入力<br>数値チェック | 検索修正  | 物品請求書<br>作成 | ラックタッパ<br>タッパ折り | 数値チェック         | ピッキング            |
| 作業時間         | 70分   | 50分            | 60分   | 50-60分      | 50分             | 45-50分         | 50-60分           |
| 休憩時間         | 10分   | 15分            | 10分   | 10分         | 15分             | 10分            | 10分              |



また、疲労やストレスに対する適切なセルフマネジメントが行えるよう、休憩を取得しやすい環境を整えると共に、段階的な支援を組み合わせで行った。

図2に全体的なカリキュラムを示す。

### 3. 結果

これらの指導・支援の結果、対象者はそれぞれの主な作業を正確かつ安定して行えるようになった。

#### (1) WCSTの結果

Bさん以外の対象者で補完手段の有効性が確認された。

Dさん、Eさん、Fさん、Gさんに何らかの認知障害がある可能性が示唆された。

#### (2) MWS 訓練版の主な作業の結果

MWS 簡易版や対象者の好み、WCSTの結果等から MWS 訓練版の主な作業を決定した(表1)。

それぞれの主な作業の結果は、個人により到達したレベルは異なるものの、ほぼ100%の正答率での作業結果となった。

#### (3) ストレス・疲労のセルフマネジメント訓練の結果

全ての対象者が作業能力の維持のために、休憩が有効かつ必要であることを認識した。

また、全ての対象者が、段階的な支援により、最終日には表1に示したような作業時間・休憩時間を、それまでのTPの実施結果として示し、計画を立てるよう促されることで、半日間の作業と休憩を計画し、ほぼその計画に沿って行動できるようになった。

#### (4) MSFAS等から見たTPの効果

TP開始当初と3日目に作成したMSFASのFシートの記入内容及び最終日に作成したTP受講の感想文から、対象者の心理的な変化を整理した。

さらに4日目午後に行った個別相談では、「自信を回復した」「疲労による障害の現

れ方の変化を理解した」等の発言も現れた。

### 4. 考察

#### (1) TPにおけるストレス・疲労の捉え方

TPでは、ストレス・疲労という個人の内面的体験について、次のような複数の視点で捉えている。

○ MSFASによりそのサインや対処行動等の現状を整理する。

○ MWSの実実施過程での行動観察や作業結果等との関連性を整理する。

○ 安定した作業結果につながる方法(補完方法の導入やセルフマネジメントの確立等)が、ストレス・疲労等に与える影響を把握する。

これらの視点から内面的体験を捉えることで、具体的な対処行動の確立に結びつけることが可能となる。

#### (2) 精神障害者へのTP実施上のポイント

精神障害者では、ネガティブな体験からではなく、ポジティブな体験から疲労やストレスへの対処を学習することが望ましい。そのためは、TP実施に際し次の様な点に注意を払う必要がある。

○ 対象者本人が実施可能と感じている作業を、主な作業として選択する。

○ 簡易なレベルから作業を積み上げる。

このような方法により、「できる自分」を維持し崩さないための、疲労・ストレスへの対処行動としてセルフマネジメント行動を確立し、さらに作業能力やモチベーションの向上に繋げていくことが可能となると考えられる。

これらの結果は、TPによる支援が、セルフマネジメント行動の確立だけでなく、自己の障害認識を高め、不安の克服や自信の回復等の、精神障害者が共通して抱える問題に対しても効果的である可能性を示唆している。

### <参考文献>

障害者職業総合センター調査研究報告書No.57及びNo.64. 精神障害者等を中心とする職業リハビリテーション技法に関する総合的研究(最終報告書)及び(活用編). (2004)

|       | 1日目                                    | 2日目  | 3日目                           | 4日目                           |
|-------|--|--|-------------------------------|-------------------------------|
| 9:30  | 集合                                     | 集合   | 集合                            | 集合                            |
| 9:40  | 自己紹介、<br>研究協力説明、<br>TPの説明、<br>同意書へのサイン | グループワーク<br>・体調確認<br>・今日の予定の伝達<br>・SF SMTの説明を確認 | グループワーク<br>・体調確認<br>・今日の予定の伝達 | グループワーク<br>・体調確認<br>・今日の予定の伝達 |
| 10:00 | MN訓練                                   | MSFAS記入<br>の支援                                 |                               |                               |
| 10:30 | ↓                                      | ↓  |                               |                               |
| 11:00 | ↓                                      | ↓  |                               |                               |
| 11:30 | ↓                                      | MSFAS内容<br>聞き取り                                | WCST 3人                       | O A課題                         |
| 12:00 |  |  |                               |                               |
| 12:30 |  |  |                               |                               |
| 13:00 | WCST 2<br>人                            | 簡易版<br>個別実施<br>数値チェック                          |                               |                               |
| 13:30 | ↓                                      | ↓  |                               |                               |
| 14:00 | WCST 2<br>人                            | 物品請求書<br>作業日報<br>(ピッキング)                       | ・訓練版の実施<br>・SF SMTの実施         | ・訓練版の実施<br>・SF SMTの実施         |
| 14:30 |  |  |                               | 個別フィードバック                     |
| 15:00 | 片付け、M-メモリーノート<br>記入                    | 片付け、M-メモリーノート<br>記入                            | 片付け、M-メモリーノート<br>記入           | 片付け、M-メモリーノート<br>記入           |
| 15:15 | グループワーク                                | グループワーク  | グループワーク                       | 講演会の準備                        |
| 15:30 | 解散<br>・スタッフミーティング                      | 解散<br>・スタッフミーティング                              | 解散<br>・スタッフミーティング             | 講演会                           |
| 16:00 | 終了                                     | 終了   | 終了                            | 終了                            |

図2. 本研究で行ったトータルパッケージの基本的なカリキュラム

# 精神障害者社会復帰施設での就労支援における トータルパッケージの活用と展望

－対処行動獲得にむけて－

佐藤修子（つがる野工房生活支援センター）

## 1. はじめに

精神障害を抱えている方々にとって、就労の維持継続は現実的に困難な課題になっている。離職転職を繰り返すケースが非常に多く、初回相談時に10数回の職歴のあるケースも珍しくない。これらの原因は個人的な要素もあり、ひとつのくりでまとめるには無理があるとは思われるが、障害そのものから派生するものが大きく影響しているだろうとの見解が主流である。とりわけ精神障害者の場合、その障害特性から情報処理機能（収集、整理）と処理容量の低下が指摘されていることなどから、ストレス・疲労状態に置かれた場合、容易に就業場面で破綻し、ひいては再発の危機さえ招く結果になりかねない。

先に当施設でトータルパッケージ（以下「TP」という。）を7名の対象者に試行実施した結果、適切なタイミングで適切な指示援助が与えられることで、対象者がストレス疲労状態を認識し、スムーズに対処行動を獲得していく過程を確認することができた。また対象者本人も自覚まで至らず専門スタッフも看過し放置していたような微細なストレス状況も含まれていた。4日間連続試行というそれ自体がストレスフルな状況と思われる環境下であったが、最終日にはストレス状況に対しての不快感を軽減する方法を学習することで、「対処できることがわかった」という実感となってそれが自信回復、意欲強化をもたらす結果となったことは特筆されるべきことだと思われた。

しかしながら、授産施設などへの入所やその中で職務を獲得していく過程の中で、一度獲得したと思われる対処行動をとれないケースが数例でてきた。この出来事をきっかけに、獲得した対処行動を般化・強化していく作業が次の課題として考えられた。

今回は精神障害者社会復帰施設地域生活支援センターである当施設における就労支援活動においてTP実施前後の変化を、支援活動にどのように生かしていくのか、またどのような用方をすれば効果的かについて考えてみたい。

## 2. 実施後に確認されたこと

下記の2点の仮説にもとづき、グループや面接等をとおして、対象者のその後を観察する。

- ① TPの実務課題実施がその後の対象者にとってどのような意味があったのか。
- ② 就業場面以外での、対象者ストレスにさら

されやすい環境について「幕張ストレス疲労アセスメントシート（以下「MSFAS」という。）のシートFを用いて、対象者が自覚できていないストレス状況を抽出できないか。

（1）TPを実施した対象者7名のうち、新規利用者が4名（女性2名、男性2名）3名（女性1名、男性2名）が関連する施設で福祉的就労を2年以上経験していた。1名の女性は当地域生活支援センターで相談を受けながら次のステップを検討している段階だった。

| 対象者   | A         | B         | C         | D         | E         | F         | G         |
|-------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 性別/年齢 | 女/<br>30代 | 女/<br>30代 | 女/<br>30代 | 女/<br>30代 | 男/<br>30代 | 男/<br>30代 | 男/<br>20代 |
| 障害名   | 統合失調症     | 統合失調症     | 統合失調症     | 統合失調症     | 統合失調症     | 人格障害      | 高次脳機能障害   |
| 実施時状況 | 新規利用      | 福祉的就労     | 相談中       | 新規利用      | 福祉的就労     | 新規利用      | 新規利用      |

TPを実施後の当支援センターのかかわりは、すでに福祉的就労中の2名については、①どういう状況下でストレス疲労状態になりやすいか。②その場合のサインの現れ方。③ストレス疲労のサインが出たときの好ましい対処行動。以上の結果を通所中の施設に報告をした。

（2）新規利用・相談中の女性3名はその後、福祉的就労に移行し、移行することで予想される各種適応上の問題や疲労の具合について話し合うなど、利用者本人が事前に準備し対処法の確認ができることを目標に、グループ活動を2週間に1回1時間実施した（グループミーティングの継続）。グループについては3ヶ月1クールで一旦終了ということで対象者に提案し開始したが、対象者から継続の希望があり現在2クール目を実施中である。内容は服薬や病気の管理に関するビデオ鑑賞、就労してみての感想や疑問、その他情報交換などである。

（3）新規利用者の男性2名に関しては、TPを活用したアプローチができないままで経過している。

（4）メモリノートについては後日指導などは特段実施はしていない。女性メンバー4名については継続して利用している。メモリノートを日記のような形で利用している対象者5名。内訳は統合失調症4名、高次脳機能障害1名である。メモリノートの使い方としては、予定等

の記録が主体で用紙としては「重要メモ」がもっとも多く、薬や病気のことに関する知識の蓄積に使っているケースが多かった。病院などでもらう処方箋を添付する形で利用している対象者もいた。

### 3. MSFASシートFとシートBを、グループや面接相談場面での利用について

(1) シートF：利用者が日常生活上で起こる事象にたいして、抱えたストレス状態は認識しても、どのように対処したらよいかがよく分からない・話を聞いて欲しいなどの相談で訪れる利用者に、その都度記入してもらい、状況分析と具体的にどのように対処するかを話しあうために利用した。用いるタイミング例としては、

例) 休日に友達とカラオケに行き、次の日疲れて仕事を休んだ。

例) 買い物をして店員の勧められるままに洋服を買いすぎた。

例) 朝は出勤するのがつらい。

例) 同僚と昼休みにどうやって過ごしたらよいか分からない等。適宜、シートFの質問については、下記のように変更して用いている。

例) 1-(1) ストレスを感じる状況について整理してみましょう。⇒変更後：ストレスを強く感じた状況について整理してみましょう。

例) 1-(2) どんな作業や活動をしているときに疲れが生じやすいですか。⇒変更後：どんなことをしていたときに疲れを感じましたか？

例) 1-(3) 自分がストレスや疲れを感じていることに、気づくサインがありますか。⇒変更後：そのときに気がつくサインがありましたか。

例) 1-(4) 意欲的に作業ができるのはどんな場面ですか。⇒変更後：ストレスを感じることがなく、楽しく感じられた状況はどんな場面ですか。

(2) シートBについては、基本的に本人がリラックスしていると自覚できる状況を想起させるように用いた。

### 4. まとめ

(1) TPを実施後に、個々の対象者の抱える課題に対して、支援計画の中にTPの要素を組み込んで展開してみた。実施後まだ5ヶ月程度しか経過しておらず、転機も含めて総括するには早急すぎるが、グループミーティング、面接相談場面におけるMSFASの使用法について広がりを感じられたので、まとめてみたい。

MSFASについては、①情報収集→情報整理→情報共有→ストレス・疲労の機能分析→対処行動の確立→支援計画作成やこれらの一連の過程が、非常に短時間にタイトでタイムリーに実施できる。②対象者も周辺スタッフにも問題志向型のツールとして非常に有効であった。③

明らかになった問題に対して協力体制を作りながら対応していくという連帯感のようなものも出てきた。④文字にあらわし文字に残すということで、良い体験を目に見えた形で残す、振り返りの材料とすることができた。⑤シートBは対象者自身がリラックス方法だと理解していたものが、場合によってはストレスともなりうるなど認識されたりした。⑥シートが増えていくことで、個々の認知的プロセスへの介入が可能になるかもしれない。⑦グループは対象者の共通の課題が明確な場合が効果的で、感情の処理の仕方やより具体的な対処行動について自発的に話し合いができる。他方、①情報が物理的にかさばる。②対象者が日常的に自ら活用できるような整理の工夫が必要。③現状では活用したシートを小さくコピーしてメモリノートに貼るなどの方法を取っているが、利用者自身が蓄積した技能を効果的に容易に実践していけるように、シートもメモリノートに蓄積が出来るような実用的な工夫が必要だと思われる。

これらのシートを利用しながら、より細かい具体的な手がかりが得られるような援助が、常に重要であるのは言うまでもない。

(2) 今回試行を実施してみて、TPが、職務習得段階におけるストレス疲労の認識を促したり高めたりというアプローチであり、対象者自身がストレス疲労状況を認識し、それに対する対処を考え試み、成功するという「良い体験」を積むことができるツールとして、とても有効であったと感じている。そして、このような一連の活動が、就労生活を維持するために、あるいは生活していく上で、必要でかつとても効果的であるということ、対象者自身が実感できたことが素晴らしいことだと思った。対象者の気持ちの中に補完手段や専門家からの支援が必要だとの認識が出来てきて、その後の支援計画に自ら参加するという姿勢にもつながっている。

一方で、精神障害の場合、取得したスキルを保持したり般化したりというのが苦手であるといわれ、常に何らかの形で援助の継続が必要であるだろうとは予想できる。かなりのボリュームのあるTPを、手軽に日常的に支援活動のなかに組み入れていく工夫が現場には常に求められていくだろうと思われる。

TPの試行実施後に、結果を施設側に伝え、ストレス疲労サインが具体的に周囲に理解されることで、施設側の配慮の仕方に変化がみられたことなどから、疲労状態を表すサインを職場と共有することは対象者理解の促進に役立つと思われた。「障害状況がわかりづらい、どういった援助をすればよいか分からない」といった事業主の声にも何かしら具体的方法で示唆ができそうな印象が強く持っている。

TPがより多くの機関に導入され、色々な使い方で試され経験が蓄積していくのを期待したい。



# 養護学校におけるトータルパッケージの活用と展望

## －特別支援教育における一人一人の教育的ニーズに応じた対応をめざして－

○木村彰孝・大石文男

(山口県立防府養護学校 支援部進路支援課 教諭)

### 1 はじめに

障害者の職場適応促進のためのトータルパッケージ（以下「トータルパッケージ」という。）は、高次脳機能障害や精神障害における「認知の障害」を対象に開発されたツールであるが、「認知の障害」に共通するものとして「軽度発達障害」や「知的障害」への適応が期待されている。

近年、養護学校等における「特別支援教育」では、従来の特殊教育対象の障害だけでなく、「軽度発達障害」を含めた障害のある児童生徒の自立や社会参加に向け、一人一人の教育的ニーズに基づいた対応が求められている。

本校ではその一つの方法としてトータルパッケージの活用を検討している。「ワークサンプル（幕張版）」（以下「MWS」という。）の活用が主であるが、「授業」や「校内実習」の中で実際に利用しており、生徒や教職員の評判も高い。

ここでは、導入までの流れや導入時の状況、教職員の反応、今後の展望等について、簡単にまとめてみたい。

### 2 特別支援教育の動向

本論に入る前に「特別支援教育」の動向について簡単に触れておきたい。

平成13年1月に「21世紀の特殊教育の在り方について（最終報告）」が、平成15年3月に「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」が示された。この中では『従来の特殊教育の対象の障害だけでなく、LD、ADHD、高機能自閉症を含めて障害のある児童生徒の自立や社会参加に向けて、その一人一人の教育的ニーズを把握して、必要な教育的支援を行い、教育、福祉、医療、労働等が一体となり、生涯にわたって支援していこう』と、その方向性が示された。

このように特別支援教育は、地域の関係者と共に、多様な障害のある児童・生徒の生涯を見通しながら、オーダーメイド型の支援により、彼らの自立や社会参加の実現を目指しているのである。

「個別の教育支援計画」「特別支援教育コーディネーター」「広域特別支援連携協議会」等の仕組みにより、特別支援教育を推進していくことになっている。

### 3 トータルパッケージの導入

障害者職業総合センターからの研究協力の依頼により、本年1月より導入のための準備を進めてきた。表1に現在までの動向を示す。

表1 トータルパッケージ導入までの流れ

|            |  |
|------------|--|
| 平成17年1月25日 | 教職員を対象としたトータルパッケージ講習会（センター研究員による実施方法伝達等） |
| 平成17年2月    | トータルパッケージ本体受領                            |
| 平成17年3月    | トータルパッケージ活用に関するアンケート実施（教職員対象）            |
| 平成17年4月    | 校内に『トータルパッケージ訓練室』を設置                     |
| 平成17年4月～   | 授業等で活用開始（『日常生活の指導』、『自立活動』等で活用）           |
| 平成17年6月    | 『校内実習』にてMWSを中心に実施（高等部生徒27名が2～3種類体験）      |
| 平成17年6月～   | 校内に「トータルパッケージの活用」のための研究チーム発足（教職員20名程度参加） |

このように比較的短時間に学校現場に導入することができたが、トータルパッケージの主旨については、未だ浸透していないのが現状である。研究チームが発足したことにより、実際の活用場面を積み重ね、学校現場での活用方法を模索したい。

### 4 教職員の反応

表1の本年1月に行われたトータルパッケージ講習会では、任意参加という形態にもかかわらず半数以上の本校教員や寄宿舎指導員が参加した。また、近隣の養護学校からの参加や山口障害者職業センターからの協力も得た。

延べ3時間にわたる講習では、軽度発達障害に対する適応可能性等に関する質問もあり、教職員の本ツールに対する期待の程をうかがわせた。

また、現在開発中の「トータルパッケージ・ホームワーク版」（以下「ホームワーク版」という。）の作業課題については、日常生活場面等で活用できる課題が設定されており、教職員にとって毎日の支援場面そのものが職業リハビリテーションに通じていることを振り返る機会にもなった。寄宿舎における生活指導場面にも応用したいという声も寄せられている。

## 5 教職員に対するアンケート結果（表2～8）

表2 トータルパッケージ講習会への参加理由

| 参加した理由                         | 回答数 | %   |
|--------------------------------|-----|-----|
| 新しい職業教育の教材として興味があつた            | 15  | 31% |
| 日生や生単、作学等への応用が出来るようになった        | 10  | 21% |
| 発達検査以外にも、他のスキルについての評価方法に興味があつた | 3   | 6%  |
| 新しい職業リハビリテーションの流れに興味があつた       | 7   | 15% |
| 児童・生徒に活用してみたかった                | 8   | 17% |
| 専門性を高めようと思った                   | 5   | 10% |

（注）日生＝日常生活の指導、生単＝生活単元学習、作学＝作業学習

日常の授業場面で活用したいという回答が多かった。自立や社会参加へ向けた支援に有用であると判断されていると思われる。

表3 使ってみたいツール(全体)

| 使ってみたいツール | 回答数 | %   |
|-----------|-----|-----|
| WCST      | 10  | 22% |
| MSFAS     | 7   | 15% |
| M-メモリーノート | 11  | 24% |
| M-ワークサンプル | 17  | 37% |
| グループワーク   | 1   | 2%  |

表4 使ってみたいツール(MWS)

| M-ワークサンプルで使ってみたい作業 |          | 回答数 | %   |
|--------------------|----------|-----|-----|
| 事務課題               | 数量チェック   | 16  | 33% |
|                    | 物品請求書作成  | 8   | 16% |
|                    | 作業日報作成   | 9   | 18% |
|                    | ラベル作成課題  | 16  | 33% |
| O A 課題             | 数値入力     | 16  | 32% |
|                    | 文書入力     | 16  | 32% |
|                    | コピー&ペースト | 6   | 12% |
|                    | ファイル整理   | 8   | 16% |
|                    | 検索修正     | 4   | 8%  |
| 実務課題               | ナフキン折り   | 16  | 25% |
|                    | ピッキング    | 17  | 27% |
|                    | 重さ計測     | 16  | 25% |
|                    | アラゲタッパ   | 15  | 23% |

授業場面で直接教材として活用できるからか、MWSへの関心が高かった。M-メモリーノートは、毎日「連絡帳」で日課確認やフィードバックを行っているため、応用が期待されている結果と思われる。

表5 活用したい場面

| トータルパッケージを活用したい場面 | 回答数 | %   |
|-------------------|-----|-----|
| 学級での諸活動           | 6   | 6%  |
| 日常生活の指導           | 9   | 9%  |
| 生活単元学習            | 4   | 4%  |
| 作業学習              | 26  | 26% |
| 自立活動              | 20  | 20% |
| その他の教科・領域         | 0   | 0%  |
| 寄宿舎での活用           | 3   | 3%  |
| 進路学習              | 6   | 6%  |
| 職業能力評価            | 5   | 5%  |
| 職業訓練的活用           | 9   | 9%  |
| 家庭と連携して本人の課題を軽減する | 6   | 6%  |
| 校内実習              | 4   | 4%  |
| その他の活用方法          | 1   | 1%  |

作業学習、自立活動で活用したいという回答が多数を占めた。自立活動では個別の指導計画に基づき実施するもので、個別の対応も可能である。

実際の活用状況は次項で述べることにしたい。

表6 活用したいケース

| トータルパッケージを活用したいケース | 合計 | %   |
|--------------------|----|-----|
| 肢体不自由              | 7  | 12% |
| 知的障害               | 16 | 27% |
| 自閉症                | 12 | 20% |
| LD                 | 4  | 7%  |
| ADHD               | 2  | 3%  |
| アスペルガー症候群          | 3  | 5%  |
| 高次脳機能障害            | 2  | 3%  |
| 特に限定せず活用したい        | 13 | 22% |

知的障害、自閉症という回答が多いのは、「認知の障害」への適応を期待されているためであろう。

表7 ホームワーク版で使ってみたい作業

| ホームワーク版で使ってみたいもの |              | 合計 | %   |
|------------------|--------------|----|-----|
| 事務課題             | 宛名書き課題       | 11 | 38% |
|                  | 健康管理グラフ作成    | 8  | 28% |
|                  | 家計簿作成        | 10 | 34% |
| O A 課題           | 数値入力         | 11 | 34% |
|                  | 文書入力         | 11 | 34% |
|                  | コピー&ペースト     | 3  | 9%  |
|                  | 検索修正課題       | 3  | 9%  |
|                  | ファイル整理課題     | 4  | 13% |
| 実務課題             | 食器洗い課題       | 15 | 29% |
|                  | 洗濯物たたみ課題     | 18 | 35% |
|                  | 包丁の使い方課題     | 11 | 22% |
|                  | 水回り清掃課題(開発中) | 7  | 14% |

4でも述べたがホームワーク版に対する期待が大きく、特に実務課題への関心が高いことがわかる。

その他、トータルパッケージに対する意見を表8に示す。

表8 トータルパッケージに関する意見

|  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>MWSを参考にもっと細かいステップを学校独自に作ったり、アレンジもしてみたい。</li> <li>家庭での支援は具体的で分かりやすいものが望まれる。小学部段階では将来への具体的なイメージが掴みにくいので、このツールを活用して意識を高めることができると思う。</li> <li>児童生徒の成長は家庭との連携があればより早く身に付くと思う。そういう意味でもホームワーク版に期待したい。</li> </ul> |
|--|

## 6 トータルパッケージ活用の実際

本校では本年4月以来、在籍する児童・生徒に対し、試行的にトータルパッケージの活用を行っている。対象は、知的障害、自閉症が主で、一部軽度発達障害も含まれている。冒頭でも触れたように特別支援教育では、従来の特殊教育の対象者に加えて、軽度発達障害を含めた対応が求められている。トータルパッケージはそれらの障害に対しても適応が期待されており、教育現場での活用も意義があると思われる。

主に活用しているのはMWSで、一部Wisconsin Card Sorting Test（以下「WCST」という。）を実施している。

試行事例が少ないこと、トータルパッケージ本来の目的である、セルフマネジメントスキルの構築まで使いこなされていない点など、今後課題を残している。しかし、作業遂行力の向上や対処行動・補完手段の必要性理解等には成果が出てきている。

### (1) 授業での活用

主に「日常生活の指導」及び「自立活動」と呼ばれる授業時間に活用している。

一般に学校現場では、教室において複数の児童・生徒を対象に授業展開がなされているため、トータルパッケージを活用するには、人数分の物品の用意や個別の支援の確保等、一斉授業の形態においては実施が困難な側面もある。

したがって、個別の対応が可能な「自立活動」を中心に展開することが最も適した活用方法ではないかと考えている。

4月以来、筆者は3名の生徒を対象に実施している。表9に実施状況を示す。各レベルのいずれかを実施したものに○印を、課題を参考にし独自の課題を実施しているものに△印を付した。

#### ア 対象者A

- ①属性 男性 18歳 知的障害（軽度）
- ②状況 就労を希望しているが、体力面や持病のため長時間の労働に対して不安が残る。作業遂行力の向上と自身による客観的な作業評価を目標に訓練を行っている。比較的複数の作業課題に取り組んでおり、指示理解も良好である。ピッキング課題等で作業時間が30分を超えるとミスがみられるようになった。このことで体力的な限界を理解し、卒業後は授産施設等から就労を目指していくことを検討することになっている。

#### イ 対象者B

- ①属性 男性 18歳 アスペルガー症候群  
手帳なし（取得できない）
- ②状況 対人関係に大きな課題を残している。就労に対して消極的であるが、得意なOA機器を利用した作業には自信をもっている。現場実習等を積み重ねていく中で卒業後の生活への適応可能性が徐々に見え始めていることから、OA課題を中心に、作業遂行力の向上と対処行動の獲得を目標に訓練を行っている。数値入力課題、文書入力課題に関しては、レベル、試行数、ブロック数を最

高に設定しても安定した作業量を確保できている。テスト・モードで実施しているが、課題終了後、記録された課題遂行状況を自ら確認することが習慣になっており、作業能率の向上や誤りに対する対処行動の獲得に役立っているようである。

#### ウ 対象者C

- ①属性 男性 18歳 知的障害(中度)、てんかん
- ②状況 脳腫瘍手術後、記憶障害、感情や疲労のコントロールに難しさが認められる。記憶障害についての自己認知と補完手段の有用性を確認するためWCSTを実施した。練習モードで数回実施したのち、3回テストを行った。練習モードも含め、何も補完手段を講じない状態では、ルールが混乱し、カテゴリー達成数が安定しなかった。そこで3つのルール（色・形・数）を記したカードとポインティングデバイスを利用したところ、未だ誤りはあるものの、かなり安定した反応が見られるようになった。この事実から、補完手段を講じることにより課題を改善することが可能であることを体験的に学んだ様子であった。M-メモリーノートを参考に、毎日の日課を確認する練習を行っているが、こちらは課題が山積みの状況で今後、対応方法を整理する必要がある。

表9 実施状況

| 課題           |      | 対象者      |   |   |  |
|--------------|------|----------|---|---|--|
|              |      | A        | B | C |  |
| WCST         |      | ○        | ○ | ○ |  |
| M-メモリーノート    |      |          |   | △ |  |
| MWS<br>(訓練版) | 事務課題 | 数量チェック   | ○ |   |  |
|              |      | 物品請求書作成  |   |   |  |
|              |      | 作業日報作成   |   |   |  |
|              |      | ラベル作成課題  |   |   |  |
|              | OA課題 | 数値入力     | ○ | ○ |  |
|              |      | 文書入力     | ○ | ○ |  |
|              |      | コピー&ペースト |   | ○ |  |
|              |      | ファイル整理   |   | ○ |  |
|              | 実務課題 | 検索修正     |   |   |  |
|              |      | ナプキン折り   | ○ |   |  |
| ピッキング        |      | ○        |   |   |  |
| 重さ計測         |      | ○        |   |   |  |
|              |      | フラグタッ    | ○ |   |  |

### (2) 校内実習での活用

本校では6月と11月に校内実習を2週間実施している。1グループ7名程度で構成され、10種類程の課題に取り組んでいる。今回、この作業課題の一部にトータルパッケージを導入した。MWSからOA課題とナプキン折り、ホームワーク版から宛名書き課題、以上3課題を選定した。これらは人数分の物品が準備でき、比較的どの生徒でも取り組みやすい点を考慮した。個々の課題に取り

組んだ生徒数は表10に示すとおりである。

表10 校内実習での実施状況

| 課題    |          | 1班 | 2班 | 3班 | 4班 | 合計 |
|-------|----------|----|----|----|----|----|
| OA課題  | 数値入力     | 6  | 7  | 6  | —  | 19 |
|       | 文書入力     | 6  | 1  | 2  | —  | 9  |
|       | コピー&ペースト | 3  | 1  | 0  | —  | 4  |
|       | ファイル整理   | 0  | 0  | 0  | —  | 0  |
| 実務課題  | ナプキン折り   | —  | 7  | 4  | —  | 11 |
| HW版事務 | 宛名書き課題   | —  | 6  | 6  | 7  | 19 |

実施にあたり、実習マニュアルやテキストを作成するとともに、担当教員向けの講習会を行った。実習マニュアルの一部を図1に示す。

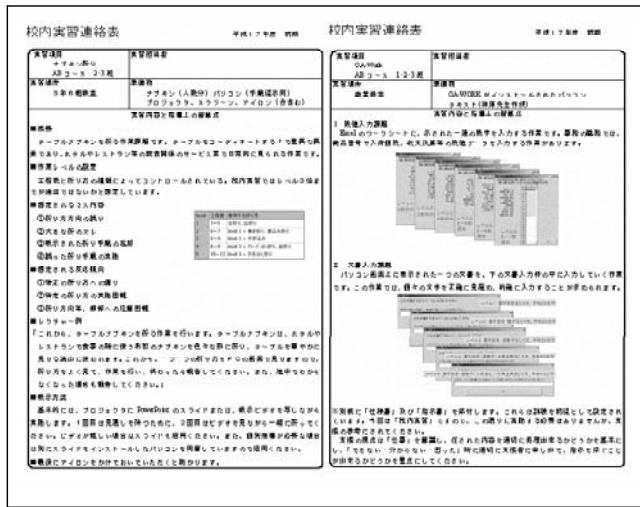


図1 実習マニュアルの一例

ア 校内実習担当教員の意見

① OA課題

- ・生徒自身で作業能率の向上が確認できる点が良い。文書入力は事務文書等取り入れてはどうか。終日行うときは内容の展開に工夫が必要。
- ・個々人のスキルに差があり集団で取り組むにはやや難があった。慣れると担当者が少数でも対応できる。生徒が大変興味を持って取り組む課題であるため、今後も実施してほしい。文書入力は「漢字力」に幅があるため大きな差ができた。生徒には数値入力が好評であった。

② 宛名書き課題

- ・データの漢字が難しかったが、段階毎の自己評価や振り返りは、とても効果的である。
- ・個々人の作業量によりLevelを設定できる点が良い。Level(4-1)まで到達した者がいた。

③ ナプキン折り

- ・興味をもって取り組む生徒が多い。パソコンを見ながら行うことで、正確に作業ができる。

イ 校内実習での複数対象者への対応上の工夫

① OA課題

- ・パソコン7台にOA-Workをインストール
- ・課題毎に作業時間を記入するテキストを作成

② 宛名書き課題

- ・6枚の葉書と自己評価をA3用紙一枚に印刷
- ・個々人に一部ずつテキストを作成

③ ナプキン折り

- ・ナプキンでの対応が難しい場合には、同じ大きさの大判用紙で対応するようにした。
- ・教示ビデオは、プロジェクトを利用し全体に放映。個別対応用に予備パソコンを準備した。

7 養護学校における今後の展望と期待

近隣の養護学校や就業・生活支援センター、地域療育等支援事業受託施設等から、トータルパッケージの問い合わせを頂くことがある。多くは軽度発達障害や精神障害への対応を期待されたものであった。これらの障害者支援施設等にもこのツールが普及すれば、学校からの移行支援等において、地域障害者職業センターを含めた相互の連携のツールとして有効に機能するのではないかと期待感を持っている。

養護学校卒業者の離職原因のひとつとして、困難場面に直面したときのコミュニケーションスキルが確立されていない点が多く指摘されている。これらのスキルの獲得も含め、在学中から計画的に本ツールの活用を進めて行けば、職場へのスムーズな移行に対しても有用な成果が得られるのではないかと考えている。

今後、家庭や寄宿舎等の協力を得ながら、ホームワーク版の活用を始め、在学中から家族を含めた支援者の構築にも幅広く取り組んでいきたいと考えている。

8 おわりに

現在本校では小学部から高等部までの20名近い教員がトータルパッケージ活用のための研究チームを作り、各学部や授業等での活用方法を探っている。その成果については次の機会に紹介したい。

《引用・参考文献》

- 1) 障害者職業総合センター：精神障害者等を中心とする職業リハビリテーション技法に関する総合的研究（最終報告書）(2004)

# 高次脳機能障害を持つ方への支援

## ー トータルパッケージの実践を通してー

○泉忠彦・千葉純子・伊藤豊・今野政美・山本和夫・池田崇文・峯岸亜紀子

(神奈川リハビリテーション病院 職能科)

### 1. はじめに

神奈川リハビリテーション病院職能科では高次脳機能障害がある方の対応が増えている。職能科を利用する方は病院の入院・外来患者、および肢体不自由者更生施設(以下「更生施設」という。)に入所されている方々である。平成17年度の4月から9月末までの利用者は270名で、そのうち高次脳機能障害と診断されている方は179名、全体の66%余である。高次脳機能障害のある方は、受傷後間もない方から、障害を知らずに地域で社会的行動障害を抱えたまま生活を送っていた方など、重度から軽度の方まで、なおかつ特性は多様である。

職能科での訓練を開始する時点で大まかな個々の障害特性は把握できており、訓練は高次脳機能障害が作業におよぼす影響などや具体的な作業を通して利用者や家族への障害理解を促すことも職業リハビリテーションとともに業務の一つになっている。

### 2. 目的

近年、高次脳機能障害がある方でパソコンを使用した作業を希望する方が多く、その目的は新規就労や復職、趣味としてのパソコンを覚えたいなどである。これまで職能科では高次脳機能障害の特性に見合った訓練教材の開発と試行を行ってきた。特にパソコン操作の教材は、難易度に沿ってスモールステップが踏めること、その方のミスが視覚的に分かりやすくフィードバックすることができ、ご本人がミスを確認でき、障害の認識につなげることが課題であった。しかし、教材の開発には時間と労力を要し、標準化や基準の設定までには至らず、未整備の領域も残されている。

一方、障害者職業総合センター障害者支援研究部門において障害者の職場適応促進を目的としてトータルパッケージを開発した<sup>1)</sup>。トータルパッケージを構成する幕張式ワークサンプル(以下「MWS」という)の中は難易度によりレベルが設定され、また、その使用については高次脳機能障害の程度に関わらず、職能科の評価・訓練教材として活用できると思われたので、訓練場面に導入し、試行を開始した。本稿ではOAワークの数値入力、文書入力を通してMWS導入について報告する。

### 3. 調査対象と方法

職能科では、インテーク時に実施される面接と作業評価結果によって利用目的や障害状況、作業能力を把握し、就労支援部門と能力開発部門に配分し作業訓練での支援を開始する。パソコンの作業課題は、就労支援部門と能力開発部門のOA事務作業で行っている。訓練は1時限40分単位の制限があり、なおかつ利用者は個々の訓練目的やPT・OTなどの他のリハビリテーションとの関係から訓練時間は1名につき1日当たり1時限～3時限(40分～2時間)程度である。このため、MWSの試行に当たっては基本的な設定にとらわれず、利用者の訓練計画や能力的な水準に見合う方法にアレンジして実施している。実施状況の調査は質問用紙への記入と回収後の聞き取りの方法で行った。調査内容は、平成17年4月から9月末までの期間内の訓練者数、MWSを実施した人数、MWSを構成する各作業課題に利用状況と実施人数、簡易版の実施方法、簡易版各作業課題の設定方法、訓練版の実施方法、訓練版作業課題の設定方法である。調査担当者は就労支援部門担当(以下「就労支援担当者」という。)4名、能力開発部門のOA事務作業担当(以下「能力開発担当者」という。)の2名である。

### 4. 結果

高次脳機能障害のある利用者総数は122名、そのうちMWSを実施したのは82名であった。OAワークの各課題別では134名に対して実施している。課題別では数値入力が33.6%、文書入力が29.9%、ついで検索課題、コピー&ペースト、ファイル管理の順であった。

#### (1)数値入力の使用状況

イ. 5名が簡易版と訓練版を使用していた。使用していない1名は、就労支援部門の模擬職場担当者で、独自開発作業課題と物品請求書、作業日報などの課題を使用していた。簡易版の使用方法は基本設定に加え試行数を3～6まで増やしていた。特に就労支援担当者は訓練版の試行数も多くする傾向にあった。

能力開発担当者は試行数を減らしていた。この理由は試行数を増やすと利用者の集中力が途切れるため、難易度が高くなるためなど



であった。10分ずつ数値入力と文書入力を交互に行うなどの工夫をしていた。

ロ. 数値入力課題の特徴として、左側無視と見落としのチェックができると捉えている。就労支援担当者の1名は、利用者の復職の際の業務がデータ入力であることからこの課題を繰り返し使用し、結果がすぐにフィードバックできることから意識して入力するように促す目的で活用していた。また、この課題を終了しエクセルを使用したデータ入力訓練では画面の左側のセルを赤く一直線のラインを作り、赤い線を意識して入力するように促していた。この入力が正確にできないことが多くなった場合は、再度数値入力課題を行うなどの工夫を凝らしていた。また、他の就労支援担当者は、担当者が左側無視を判断して指摘するのではなく、実施直後、画面に結果が表示されることで、フィードバックが担当者と利用者との人間関係に依存することなく説明ができると話している。

ハ. この課題はパソコン使用の経験がない場合でも活用できると捉えている。能力開発担当者は、この課題をパソコン操作が可能かどうかを判断する一つの材料として活用していた。この課題を画面上に担当者が設定し、利用者はこの課題を進めていく手順を覚えなければならない。この手順を覚えられるかどうか、また、マウスの動きや入力の確認ができていられるかどうかを観察すると話している。繰り返し、この課題を行ってもこの手順が分からない人は、パソコンの操作が難しいのではとも述べている。手順がなかなか覚えることができなかつた利用者の1名は「数値を入力しているだけじゃないか」と話したが、繰り返し行ったところ「こんなことができないんじゃ、仕事に戻れないですね」と語ったそうである。

## (2) 文書入力の使用状況

イ. この課題は、パソコン操作の経験者でなければできない課題である。就労支援部門では簡易版・訓練版ともに試行回数を減らす担当者は、失語症の影響、見落としなどをチェックするために活用していた。増やしていた担当者は全角と半角の入力ミスの訓練として活用していた。

ロ. 能力開発担当者は失敗をさせないようにレベルを2以上に上げない、短時間で結果が出るように工夫を必要とする方が多いと話している。練習モードの○・×のフィードバックを励みにする方もいる。また、この課題に導入できない初歩的なレベルの方もおり、その方は50音の入力から始めていた。

ハ. 各担当者とも訓練版を継続するのではなく2～3回活用したあと他の教材を活用した訓練に移行していた。また、他の教材で訓練をしたあと訓練版を実施し、入力時間を計測し、早い遅いなどを示すことで入力時間短縮の視覚的フィードバックとしても活用していた。

## 5. 考察

今回の報告は導入に際しての職員の活用状況をまとめたものであり、主観的な要素が多いことは否めない。しかし、このトータルパッケージは使用目的や使用方法に多様性を持っている<sup>2)</sup>ことから、職能科として今後の活用するに当たっての課題を整理した。

### ① 使用方法の基準を持たせること

現状では簡易版を完全に実施することは難しい。しかし、職能科での活用基準を設定することで高次脳機能障害の評価につながり、共有できる。

### ② 課題の基準値を設定すること

現段階では数値及び文書入力の時間的基準が示されていない。基準値を明確にすることで、より有効な評価やフィードバックができると考えられる。

### ③ 使用の目的

単に作業評価および訓練に使用するだけでなく、フィードバックによる高次脳機能障害の理解の促し、代償手段の活用などの促しなどに活用できると思われる。

### ④ 高次脳機能障害のチェックとしての活用

初期段階でパソコン作業への高次脳機能障害の影響をチェックすることへは有効と思われる。利用者自身にもフィードバックでのチェックは有用である。

### ⑤ 難易度

画面の文字の大きさなども小さくて実践的である。反面、重度傾向の方には簡易版の数値入力そのものが難しく、自信を失う場合がある。試行数を減らす、訓練版において簡単な設定で実施するなどの工夫が必要である。

## <参考文献>

- 1) 勿田文記：ワークサンプル(幕張式)(MWS)の理論的背景、「精神障害者等を中心とする職業リハビリテーション技法に関する総合的研究(最終報告書)」, pp. 99-172、障害者職業総合センター(2004)
- 2) 長谷川信也：M-ワークサンプルの有効性についての考察、「精神障害者等を中心とする職業リハビリテーション技法に関する総合的研究(活用編)」, pp50-60、障害者職業総合センター(2004)